

題：『ポーンプッシュ！！』

作：久納 一湖

・あらすじ

彼には今年も会えなかった。

カフェで待ちぼうけていた耕平は隣席の女性からチェスに誘われる。対局中、彼は「友人とのチェス再戦を3年待っている」と明かす。女性にも敗北するが、彼女は友人の名前がミハイルだと知ると、再戦は叶うと告げ去っていく。耕平は女性を見送って、「前進せよ」と呟いた。

・特記事項

今年からチェスを始めて、楽しくなったので書きました。長編版も企画中です。  
楽しいです。

・本文文字数

4900字

・本文

汽笛が鳴る。気持ちが逸る。カモメが飛ぶ。

暖かな風に導かれるように、横断歩道を渡り、港への階段を下る。その波止場にはもう、大きな客船が入港していた。毎年この時期に外国からやって来る船だ。港に並ぶ飲食店は既に賑わっており、テラスで食事を楽しむ客が船に向かって手を振っていた。耕平は太陽のまぶしさに一瞬目を細めると、皆と同じように手を振った。あの中に、友人はいるのだろうか。

船は着港したばかりだ。下船開始には、まだ時間を要するだろう。耕平はいつものように向かいのカフェテラスに席を取り、クリームソーダを注文した。また汽笛が鳴る。

ボディバッグから古びたチェス入門書を取り出し、ページを捲った。オープニング戦略の項には、駒の行く手を示したいくつもの矢印だけでなく、三人分のラクガキが残っている。自分、シロ子、そしてミィ。猫やらウサギやら意味不明の線もばらまかれていたが、中でもミィの筆跡は、何が書いてあるのか全くわからない異国の文字だった。ある程度ことばを教わったおかげで、ブロック体は何とか解読できるようになったが、ラクガキは筆記体だった。一文字目がBなのは予想がつくが、あとはわからない。書いた本人に意味を聞きたいのに、もう三年も会えていない。

いくつかチェスの問題を解く。ふと顔を上げると、下船が始まっていた。耕平は入門書をテーブルに置くと、ストローを咥えながら船に注目した。多くの人々が歓迎されている。誰も彼も笑顔を浮かべ、船周辺は再び賑わいを見せていた。

しばらく目を凝らして船周辺を見つめていたが、自分が探す顔も、自分を探す顔も見当たらない。耕平は、ため息を押し込んだ。

時折、入門書に目を通したり、トンビの旋回を眺めているうちに、いつのまにかグラスの中身は空になっていた。次第に人の姿はまばらになり、自分の代わりに汽笛が嘆く。

今年も会えなかったか。

この船でやって来ると連絡があったわけでも、今日会おうと約束したわけでもない。自分が勝手に待って、勝手に落胆しているだけに過ぎない。それでも胸の奥には三年分の虚無が降り積もる。

耕平は、憎らしいほどの快晴を見上げたあと、メニューを開いた。帰ろうか、もう一杯頼んで粘ろうか。その前に一度手洗いに行くかと、席を外した。

戻ってくると、隣の席には淑女が居た。サマーニットにパンツスタイル、革靴を合わせた姿はどこか知的で、淑女と言い表すのにふさわしい身なりだった。

それよりも何よりも、耕平はテーブルの上に釘付けになった。チェス盤が展開されている。耕平は静かに席に着き、広げた入門書で顔を隠しながら駒の動きを盗み見た。彼女は白髪交じりの髪を押しさえながら、既に頭の中で考えていたであろう配置に駒を並べ、ビショップを摘みながら考えこんでいる。すると、耕平に気が付いたのか、こちらへ顔を向けた。耕平は慌てて視線を手元に戻すも、彼女はまだ自分を見ている。チラリと目配せをすると、声を掛けられた。

「一戦どうかな？」

「え？」

どうして自分がチェスをプレイできると知っているのだろうか。不思議そうな顔をした耕平を見て、彼女が笑った。

「だって、あなた。チェスの本を読んでる」

「あ、そうでした」

「一人で指すのも飽きちゃったのよ。付き合ってくれない？ ほら、早く」

彼女は笑顔で言いながら、盤上の駒を全て初期位置に戻していった。断るタイミングを完全に失った耕平は「実は少し気になってました」と本音をこぼしつつ、隣の席に移動した。入門書をテーブルに置き、遠慮がちに、椅子を引く。

「何か飲む？」

空になったままのグラスを見て、彼女が言った。

「対局のお礼に、ご馳走しよう」

「いや、悪いです」

「私をご馳走したいんだ。きっといい勝負になる。何がいい？」

「じゃあ、お言葉に甘えて……。ありがとうございます」

彼女はアイスティーを二つオーダーすると、両手をすり合わせて「さあ、始めよう。どうぞ！」と先手を促した。待ちきれない様子だ。耕平の前には、白の駒が並んでいる。たった今から、彼らは耕平の忠実な兵隊だ。その力を引き出せるかは、全て司令塔である自分にかかっている。

耕平は緊張しながらもポーンを掴み、ニマス前進させる。木製の駒が、盤の上でカツンと軽快な靴音を鳴らす。彼女もすかさず黒ポーンを押し出す。次いで両者がナイトを弾ませると、シンメトリーな駒展開で序盤がスタートした。冷静に、キャスリングへの手順を踏む。定石手だ。恐らく彼女もそのつもりだろう。まずは駒を展開させ、自分の城を築き、戦いの準備を整える。本当の勝負はこの後だ。

穏やかな表情とは裏腹に、彼女の手は攻撃的だった。このままだと防戦一方になる。耕平は一度背もたれに身体を預け、盤面を俯瞰した。この指し方や展開に、覚えがあった。彼女の戦い方は、友人のそれによく似ている。耕平はポーンをさらに前進させ、斜めからの狙いを牽制する。すると今度は、反対側から攻めてくる。じりじりと、追い詰められている。顔を上げた。無意識に額を拭う。アイスティーが来ていたことに気づけなかった。氷が溶けてグラスも汗をかいている。

「チェスは独学？」彼女がやんわりと尋ねた。

「いいえ。昔、友達に教わりました」盤上を睨みながら、耕平が答える。

「随分と手堅い指し方だね」

「そいつの動かし方が、うつつたんです。とにかくキングを安全に、って」

言ったそばから強力な駒をひとつ失い、耕平は思わず「あ」と声を漏らした。相手の駒が見えていなかった。取り返すか一旦無視するか。彼はしばし考えた後で、盤のセンターへさらに駒を前進させた。

「さっきみたいに、よく駒をタダ取りされてました。未だに見落としてしまう」

「どんな熟練者にも、見落としはある。それが面白いところ。一手のミスで、全て無に帰す」

彼女は言いながら、クイーンを移動させた。あからさまにこちらのキングを狙ってくる。あっさりとは防ぎようのない位置に駒の侵入を許し、耕平は思わず頭を抱えた。駒の展開も盤上の布陣も、一見すると耕平の白が有利に見えるが、彼女はサードアイを標準装備していると思えるほど、耕平の思考圏外に攻撃を仕掛けてくる。力の差は歴然だった。

しかし、耕平も引かなかった。相手の戦略は、盤上を見ればどことなく理解はできる。問題は、どう崩すかだ。自分に「ビクトリーラインを見出せるかどうか、勝負だ」そんな友人の声が、頭をよぎった。

「それが大事だって、そいつが言ってました」

「チェスを教えてくれた友達のこと？」

「はい。一六歳の時に外国から来た奴です。俺は、`ミィ、`って呼んでました」

耕平もクイーンを躍らせ、攻撃を仕掛ける。

友人の呼び名と、この一手、どちらに反応したのか不明だが、彼女の目が鋭くなった。耕平のキングは、壁のように配置されたポーンによって固く守られている。しかし彼女は、ルークをすぐ手前まで突撃させ圧力を掛けてきた。これには唸るしかなかった。終わりが近づいている。だが、こちらにもまだ手はある。あるはずだ。諦めたくないんだ。

しかし耕平は、盤上を見つめて肩を落とした。これは覆せない展開だと、気が付いたころには遅かった。どこをどう睨みつけてもビクトリーラインが浮かばない。いつの間にか自分の布陣は連携を失い、どこに何の駒を置いても、意味の成さない状態に陥っていた。自分の城が、崩落していく音が聞こえた気がした。

「俺は、ミィには一度も勝てませんでした」

耕平は小さく呟いた。終盤はあっけなく、思っていた通り、彼女はクイーンでこちらの駒を奪い取る。こうなると、たとえポーンで取り返したところで、こちらのキングは逃げ道を失う。何度も起死回生の一手を探るが、盤上で実体化できるラインは見出せなかった。何手も前から、相手の中で確定していた勝ち筋に翻弄されていただけか。駒を掴んだ手が、虚空を彷徨う。諦めたくないとしつこい反撃をするも、徒労に帰した。耕平は盤上を睨みながら、膝に置いた手を力いっぱい握りしめた後、彼女を見上げた。

「紳士であれ」

穏やかに、彼女は言った。耕平は深く息をつく。そして頷き、自分のキングを静かに伏せた。すると、周囲のざわめきと、街の空気、温度や風が戻ってくる。カフェに居たことを忘れていた。対戦中は、まるで別世界に居たような気分だった。緊張から解放されると、目の前に手が差し伸べられる。女性は「ハラショー」と口にし、にこやかに握手を求めてきた。耕平は手を取り、握り返しながら「オーチニ ハラショー」と言うと、「ミンェ ザブート コーヘイ」と続けた。女性は嬉しそうに、「ヤー、ナーシャ」と名前を告げた。

「悔しい。あっさり負けてしまった」握手を解き、耕平は苦笑いを向けた。

「そんなことはない。あなたは、私の手に途中で気づいたね。素晴らしかったよ」

耕平は首を左右に振りながら、氷の溶けかけたアイスティーを口にした。喉の奥と、フル回転させていた頭が冷えていく。二人はしばし、棋譜解析に没頭した。どの一手が勝敗の分

かれ道だったのか判明すると、耕平は顎をさすって俯いた。序盤から既に崩れていたのだ。彼は思わず口を開いた。

「昔、ミィに同じ手で負けたなって思い出しました。またやっちゃったのか」

「その友達は、今はどうしているの？」

「とつぜん国に帰ってしまって。それ以来、三年も会えてないんです。つまり俺は、勝ち逃げされてるんです」

「まあ」

耕平は視線を流し、客船を見つめた。

「あの船に乗って戻ってくる、ってメモだけ残して。俺はそれを信じて、港に船が入るたびに、ここで待ってるんです。次こそ勝つために」

「聞いてもいいかしら。ミィって言ってたけど、それは愛称よね？ その子のお名前は？」

「ミハイル」

「まあ……」

ナーシャは言いながら口に手を添えた。耕平は不思議そうな顔を浮かべるも、続けた。

「ミハイルの愛称はミーシャなのに、ミィって呼ぶのは耕平くらいだって、よく言われました」

「そうね。確かに、他の子はみんな、あの子をミーシャって呼んでたわね」

何かを思い出しながら、ナーシャは嬉しそうに微笑んだ。すると、汽笛が聞こえてくる。彼女は「あら大変」と言って顔を上げた。急いでチェス盤を片づける。

「そろそろ行かないと。手続きに遅れてしまう」

「あの船に乗るんですか？」

「ええ、私もね、帰らないといけないの」

慌ただしく席を立ち、トランクを引っ張り上げるナーシャに耕平は声をかけた。

「荷物、運びましょうか？」

「スパシーバ。素敵なお紳士の申し出を断るのは心苦しいけど、コーヘイにはそこから私の船出を見送ってほしいな」

「え？」

「コーヘイが船の前まで行くのは、今じゃない。その友達が、来た時よ」

「そんな、いつ来るかもわからないのに」

「大丈夫。ミィには、きっと会える」

「何を言って……」

言いかけた耕平を笑顔で制して、ナーシャは嬉しそうに告げた。

「再戦できる日はきっと来る。それまで、腕を磨いておきなさい。あの子に勝てるように。ありがとう、楽しかったわ」

「ミィを知ってるんですか？」

耕平がそうきくと、彼女は「Вперёд! (フピリョート!)」と言い残し、船に向かって駆け出して行った。慌てて礼を言う。耕平は再び席に着くと、その言葉の意味を考えながら、すっかり氷の溶けたアイ스티ーを啜った。しばらくすると、船上から、こちらをめぐらして大きく手を振る姿が見えた。ナーシャだ。耕平は立ち上がり、三年前に見送れなかったミィの分まで、全身を使って両手を振った。

次にあの船がやってくる時は、ミィに会えるような気がした。そして再戦し、今度こそ彼のキングを打倒すのだ。

「フピリョート、……前進せよ！」

ふいに眩いた瞬間、ミハイルの顔が浮かんだ。一見穏やかだが、内に秘めた熱を悟られまいとしている、あの顔だ。入門書を開き、彼の筆跡を辿る。思わず笑みがこぼれた。

暖かな風が吹き抜けて、耕平の背中をそっと押していった。